

子どもから大人にまで人気。
他の集落からも訪れます。

中里集落区長

野間 昭夫 さん(68)

中里には、旧暦9月壬の戌の日に、集落総出で墓地に赴き先祖を祭る「ウヤンコウ」という風習があります。ソーメンガブーは、その2日後に行われる習わしです。これらの運営は、村の会議で選出された3人ほどの頭取が仕切ってきましたが、現在は青壮年団「まりろう会」が行っています。この日は学校も休みで、子どもの頃はワクワクしました。現在も子どもから大人にまで人気があり、他の集落からも大勢の人が訪れます。



素麺が数束入ったパッケージ。ソーメンガブーではこれを丸ごと投げる。

ソーメンガブー

喜界町中里／旧中里公民館

無礼講で素麺を奪い合う

スリル満点な豊年祭

喜界島の北西部にある中里集落では、旧暦9月甲の子の日、伝統行事「シマ遊び」が行われます。シマとは集落の意味で、この日は子どもからお年寄りまで集落総出で参加し、豊年を祝い、無病息災を願います。

この行事は旧中里公民館の庭で行われ、午後2時、「マーターターバー」という清めの踊りから始まります。踊り手が一列になって土俵を左回りに囲み、足だけで踊りながら場をはらい清めた後、八月踊りや相撲が夕方まで奉納されます。このシマ遊びのクライマックスが、最後に行われる「ソーメンガブー」です。

夜7時、近隣集落から人々が続々と集まります。毎年1200もの袋詰め素麺が公民館の屋根や檣の上から投げられ、夜空を舞い、老若男女が入り交じって争奪戦が繰り広げられます。

「手に入れた素麺は、その夜のうちに食べる」とご利益があるといわれ、素麺を食べるまでがソーメンガブーの行事です。この日は無

鹿兒島には、古くから受け継がれてきた個性豊かな伝統行事祭りが残っています。今回はそんな伝統行事の中から「ソーメンガブー」をご紹介します。

礼講で、誰から素麺を盗んでもよく、無事に持ち帰っても、ゆでた鍋ごと盗まれることもあるので、最後まで気が抜けません」。こう話す中里集落区長の野間昭夫さんは、集落の行事を守り伝えていくひとり。「本来はねずみの害をはらう子の日の祭りでした。ねずみへの供物が行き届くようにという願いが盗み合う形になり、娯楽として発展したと考えられています。ガブーとは塊のものを指す言葉で、元々はおにぎりだったのが、明治以降に素麺に変わったようです」

今年の開催日は10月20日。年に一度の無礼講は、夜遅くまで続きます。



喜界町

喜界町は、昭和31年に喜界町と早町村が合併して発足した総人口7,440人(平成26年7月1日現在)のまちです。大島本島の東北端にある隆起サンゴ礁の島で、集落が海岸線に沿って展開しています。写真は「サトウキビ畑の一本道」。約2.5kmの道で、別名「東シナ海へと続く一本道」とも呼ばれ、観光客に人気のあるスポット。見渡す限りのサトウキビ畑、青い空と海が印象的です。